

# 歯科 技工

THE JOURNAL OF  
DENTAL TECHNOLOGY

1997  
Vol.25 No.8

■特別企画座談

## 今こそ問われる審美 歯科のフィロソフィー

ハイオニアと語る審美歯科の昨日・今日・明日  
Ronald E. Goldstein・桑田正博・中原悦夫

■特集

## 生体機能義歯…ノンルーフデンチャー およびノンリテーナーデンチャー の臨床的展望

新倉久市・寺岡文雄・須田誠治

●新知見

プリント法による抗菌性レジン床義歯の製作と  
その抗菌効果について  
中野田紳一・浜田泰三

●シリーズ/生体に調和した咬合の再構成をめざして

第8回(最終回) ナノロジーにおける新臨床術式  
ツインホビー咬合器を用い咬合を再構築した臨床例  
田村勝美・小林和一

8

医歯薬出版株式会社

# 歯科 技工

THE JOURNAL OF  
DENTAL TECHNOLOGY

1997  
Vol.25 No.8

8

## C O N T E N T S

### ●特別企画座談

今こそ問われる審美歯科のフィロソフィー  
ハイオニアと語る審美歯科の昨日・今日・明日  
Ronald E. Goldstein・桑田正博・中原悦夫 961

### ●特集

生体機能義歯…ノンルーフデンチャーおよび  
ノンリテーナーデンチャーの臨床的展望

1. 義歯臨床におけるチェアサイド・ラボサイドの問題点からみた生体機能義歯の概念

新倉久市 982

2. 各種データからみた生体機能義歯の機能評価

寺岡文雄 984

3. 生体機能義歯設計例

Case 1 上下顎総義歯の適合・咬合状態改善を図ったノンルーフデンチャー設計改変例

Case 2 床面積の広い上顎部分床義歯のノンルーフ・ノンリテーナーデンチャー設計改変例

Case 3 3/3 残存症例に対するノンリテーナーデンチャー設計例

新倉久市

Case 4 上顎両側遊離端欠損症例に対するノンリテーナーデンチャー設計改変例

Case 5 下顎片側遊離端欠損症例に対するノンリテーナーデンチャーの設計改変例

須田誠治 993

### ●明解連載

臨床が見える！今度のはわかる！もう一度学ぶ歯科理工学  
Project 5 埋没の原理と埋没材を理解する  
2. リン酸塩系埋没材の特徴を理解する

宮崎 隆 931

### ●Step up講座

再製のないデンチャーの製作Suggestion  
第7回 片側遊離端義歯の転覆を人工歯排列の工夫で解決する

生田龍平・船坂俊夫・丸森賢二 939

### ●Home Page—What's cool site

Shuko.Y. 978

### ●新知見

プリント法による抗菌性レジン床義歯の製作とその抗菌効果について

中野田紳一・浜田泰三 1005

### ●シリーズ/生体に調和した咬合の再構成をめざして

第8回(最終回) ナソロジーにおける新臨床術式—ツインホビー咬合器を用い咬合を再構築した臨床例

田村勝美・小林和一 1015

### ●Question&Answer

日常臨床でちょっととまどうこの操作が知りたい—デンチャー編

第1回 総義歯の前歯人工歯排列

佐藤幸司 1026

### ●特別レポート

International-Dental -Schauに見る最新のドイツの器材・材料を探る

～世界的規模で行われるデンタルショーに歯科関係者の耳目が集まる～

原田浩和 1042

### ●Nice Hint 伝えたい小さな工夫

No.64 鑄造するフックスパターンを計量し溶解金属の重量を正確に算出する

斉藤政仁・徳田瑞恵 1048

No.65 透明レジンを用いて審美性を損なわないように義歯床を修正する

鈴木 誠 1049

No.66 ファーネス用のプザーとランプを手近な場所に設置しリング焼却完了を知る

松永 章 1050

No.67 フラスコを改良して金属床製作時のシリコーン印象材を節約しスペースの均一化を図る

山本和寛 1051

### ●この用語知っていますか 第7回

一歯周治療編—

■歯周外科治療 1 歯周ポケット除去手術

小杉積久・長谷川絏司 1052

一咬合編—

■咬合カーその発現様式

渡辺 誠 1053

一インプラント編—

■エマーゼンスプロファイル

細川隆司 1054

一歯科理工編—

■合着

長谷川二郎 1055

### NET WORK

MONTHLY REPORT 「第12回日本審美歯科協会学術大会講演会」に参加して～審美歯科の原点に戻って～：恵良浩之

出版物の再販制度についての基本方針：自然科学書協会

日技生涯研修

INFORMATION 「第5回日本歯科色彩学会総会ならびに学術大会」開催のお知らせ

MOTHLY REPORT 「第29回日本歯科理工学会学術講演会」に参加して～最新の材料・器材の評価をいち早く知るための格好の場～：菊地聖史

プロダクツニュース 「マイルドリベロンLC」「グレインスライダーNK」「ピタVMK95」「クインテスセラフィー」

【特別企画座談】

# 今こそ問われる審美歯科の フィロソフィー

パイオニアと語る審美歯科の昨日・今日・明日

Round-table Discussion Special

**Esthetic Dentistry Philosophy, Now Demanded**

Discussion on Yesterday, Today, Tomorrow of Esthetic Dentistry

Joined with The Pioneer



**Ronald E. Goldstein**

American Academy of  
Esthetic Dentistry 元会長

アメリカにおける歯科医師の社会的な評価は高いと聞きます。尊敬される職業ランキングのベスト5の常連ともいわれます——アメリカにおいて審美歯科が隆盛を誇っているという話を聞くと、ついこのことを連想してしまいます。

審美歯科の元祖ともいわれるアメリカにおけるこの分野の本格的な活動は、1975年の“American Academy of Esthetic Dentistry (AAED)”の創設まで遡るとされています。この学会の創設を機に、アメリカは歯科界はもとより一般国民をも巻き込んで、つまり歯科医療が強い社会性を発揮し、また社会に認知されて今の歯科界の状況を現出させるに至ったと考えることもできます。

一方、わが国においても審美歯科は大いなる関心を呼んでいるようです。ただし、現在の歯科の社会状況はアメリカと比較することは難しいようです。この違いはいったいどこに起因するものなのか——、ということも含め、本特別企画では、AAEDの共同創設者であり審美歯科界の重鎮でもあるRonald E. Goldstein先生を中心に桑田先生、中原先生により審美歯科の本質を明らかにする討論を行っていただきました。

<編集部>



**桑田 正博**

クワタカレッジ校長



**中原 悦夫**

協立歯科院長

## 審美歯科をリードする

### “American Academy of Esthetic Dentistry(AAED)”誕生前夜 多くの巨人たちが群雄割拠していた

#### ■ 1959年のDr.PincusとDr.Goldsteinとの出会いが、そもそものスタート

桑田 “AAED”が設立されたのが1975年。今から二十数年前にもなります。Charles Pincus先生とGoldstein先生とで設立し、初代の会長にPincus先生が就任された。その当時のアメリカの様子は、その時期にちょうどアメリカで仕事をしている関係でよく理解しているつもりです。そしてお二人が学会の設立に際して大変な苦勞をしたことも覚えています。

しかし、学会設立後20年くらい経過した今になって、設立の意味、意義、重みがますますよくわかるようになってきました。お二人がされたことは、“AAED”という学会を作っただけではなく、この学会を通してアメリカや世界の歯科臨床の指針を作ると同時に、世界の人々の歯科医療に対する期待感を著しく向上させ、それに対応できる臨床術式の開発にも尽力されたことにあると思うのです。

Goldstein そのような大げさな話ではありませんが、Pincus先生にお会いしたことが、ゆくゆく“AAED”を設立するうえでの礎となったことは事実で、確かに二人でこの学会の設立にあたってのイニシアチブはとりました。



▲“審美歯科の祖”とも称されるDr.Charles Lerand Pincus<Goldstein>

私がPincus先生に最初にお会いしたのは1959年です。当時、私はアメリカ海軍に歯科医師として勤務し、ベルギーにおりました。2年間に一度も休暇も取らずに一所懸命に勤務し、診療についても上司が大変に評価してくれていましたので、2年間でたった60日間の有給休暇を自由に使わせてくれたのです。このボーナスを利用してPincus先生にお会いするために、ベルギーのノッケサーマーに行きました。何と云っても、すでにPincus先生は審美という点では最も有名で、ハリウッドの映画スターたちが信頼を寄せている先生だったからです。ぜひお会いしたい先生の一人だったわけです。

ノッケサーマーでは、Pincus先生は「アクリルレジンによるクラウン」について講演をし、私も「アクリルレジンの暫間修復物」についてテーブルクリニック

**Ronald E. Goldstein**

1933年11月アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ市出身。エモリー大学歯学部卒業（57年DDS取得）。“AAED”の共同設立者であることは広く知られているが、そのほか20校以上の大学で研修コースを開き、アメリカ合衆国、カナダ、南米、オーストラリア、アジア、ヨーロッパにて300以上の歯科関係の学会で講演を行っている国際人。また一般向けに、人気の高いテレビ番組“P.M. Magazine”のレジデント歯科コンサルタントを3年間勤め、70以上の番組制作を担当した。多くの大学の教育に携わり、現在、ボストン大学歯学部歯科補綴学講座臨床教授、南カルフォルニア大学歯学部ロサンゼルス校客員教授、テキサス大学健康科学センター修復歯科学助教授などを兼任する

**桑田正博**

1936年10月満州出身。56年愛歯技工士養成所（現在の愛歯技工専門学校）卒業。62年愛歯技工士養成所より派遣されて渡米。64年セラモメタルレストレーションの桑田システムを開発。世界各国において講演、ポストグラジュエートコース開催。72年株式会社クワタパテント設立。80年ワシントン州名誉市民となる。現在、ボストン大学歯学部客員教授、“AAED”アクティブメンバー。60年代、70年代に活躍した世界の巨人たちと仕事、研究をするなかで国際的な人的ネットワークを構築・有するわが国歯科界の国際派

**中原悦夫**

1959年4月山口県出身。歯学博士。84年日本歯科大学歯学部卒業。87年タフツ大学歯学部研究留学。89年現在の診療所を開設。93年“American Academy of Cosmetic Dentistry”の日本人初の認定会員となる。現在、メディカルトレーナー専門学校嘱託助教授、株式会社ヘルス・ケアシステムズ取締役という立場を通じて患者を中心とした医科と歯科とが連携した新しい医療のシステム作りを目指している。またパブリックエデュケーションの一つとしてマスコミとの連携にも精力を注ぐ

を行いました。そのときのベルギーの歯科医師の間での評価は Pincus 先生より私のほうが高かった。というのも、変色、劣化しやすいというアクリルレジンの物理的性質によるもので、私の発表した暫間的な修復物のほうが Pincus 先生が発表された最終補綴物的な使用法より合理的と判断したからだと思います——こんなエピソードもありまして、私たちはよき友人となったのです。

**中原** Pincus 先生と Goldstein 先生とでは親子ほども年が離れていると思いますし、当時では知名度が違いすぎると思うのですが、そのような関係でも Pincus 先生は Goldstein 先生を友人として認めてくれたのですか。

**Goldstein** ロサンゼルスで Pincus 先生のオフィスにパートナーとして来てくれないかという申し出もありましたが、私の父がアトランタでオフィスを構えていまして、そこで父親と一緒に診療することが私の夢でしたので、そのお話は断らせていただきました。本当に光栄なことだったのですが。

そして、その年私はアトランタに戻り父と診療を始めました。その一方で Pincus 先生の考えや知識を吸収したいと思い、Pincus 先生の研修コースすべてをと

りました。しかし、だからといって Pincus 先生は私を弟子のように扱うことはなく、あくまでもよき友人としての関係で接してくれたのです。

**桑田** アメリカと日本との人間関係の違いが出ていますね。たとえ初対面だろうと、ネームバリューが違おうとも、たとえ自分の研修コースの受講生だとしても、Pincus 先生は Goldstein 先生の実力を認めたのだと思います。

#### ■“AAED” 設立以前は多くの巨人が個別に活動をしていた

**Goldstein** 1959 年当時、審美“Esthetic”について教える研修コースが 12 ありました。私はそれらのコースすべてを受講しました。なかでも、桑田先生のよき理解者でもある Robert Sheldon Stein 先生（元ボストン大学歯学部教授）は、セラミックスに関しては最も重要な先生でした。私は Stein 先生の研修コースも繰り返し繰り返し受講しました。審美という点に関しては、Pincus 先生と Stein 先生は、私の基礎を作った恩師といえるかと思います。と同時に友人でもあるわけです。

**中原** Goldstein 先生の 1959 年当時のお話は、まだ生まれてもない私にとっては体験ができない貴重な話、いわば歯科の歴史の一部を紐解いていただいているようなものなのですが、私の歴史についての知識からいいますと、当時は、まさしく歯科界の巨人といわれる方々がいたのではないのでしょうか。そのような方々と先生との関係はどうだったのでしょうか。

**Goldstein** おっしゃるとおり、今となっては歴史に名前を残す多くの著名な歯科医師がいました。そのなかでは、Morton Amsterdam 先生、Peter K. Thomas 先生には機能や咬合について教えてもらいました。

審美について熱心に診療をしている先生がいて、一方では咬合や機能についてのみ教えている先生がいる。つまり、歯科医療に必要なことをすべて学ぼうとすると、それぞれの研修コースを受けなければならなかったのです。ところが、こういった著名ではあるが、それぞれに方向性の異なる先生方の研修を受けて自分自身の臨床を構築してゆくと、「これらの事項はすべて統合するべきである」ということに気がつきました。言い換えると、さすがに巨人といわれている人たちが行っている診療や研修の内容には、通底するフィロソフィーがあったということなのです。これについては後で詳しくふれたいと思うのですが、問題は、これらの人たちがお互いにほとんど交流がなかったということなのです。そのために、総合的な歯科臨床の構築ができていませんでした。

私は、この有能な人たちの人的な交流・結集なくしては、総合的な歯科臨床の構築はないと思いました。そこで Pincus 先生に相談をしました。「“AAED” を設



▲“AAED”の誕生に深くかかわった関係者。左より私 Goldstein（78年学会長）、Dr.Charles Pincus（76、77年学会長）、Dr.Raymond Contino（79年学会長）、Dr.Gordon Christensen（80年学会長）<Goldstein>

立したいのですが、私一人では荷が重すぎます。私が東海岸の関係者をまとめますから先生には西海岸をお願いしたい」と、Pincus先生は若い私を信頼し、会の設立に奔走してくれました。ついに1975年2月、シカゴのブラックストーンホテルに当時アメリカや世界で活躍中の錚々たるメンバーが集まったのです。Robert Sheldon Stein, Raymond Contino, Gordon Christensen, Alex Koper, David Shelby, Peter E.Dawson, Jack D.Preston, Carl E.Rieder, ……。ところが、Dawson先生はPreston先生と、Preston先生はRieder先生と口を利こうとしなかった。会の初めのほうでは、今にも爆発しそうな緊張した雰囲気がありました。しかし、会の進行とともに仲良くなり、お互い尊重するようになったのです。ここに、ついに“AAED”は創設されたのです。多くの有能な人たちの協力の下に。

**桑田** 私も1962年に渡米し、多くの歯科界の巨人たちから直接に教えてもらう機会を得ました。あるいは、その方たちの臨床ケースの技工を行うことさえもできました。しかしよく考えてみると、巨人たちそれぞれは個々に活動を行っており、相互の交流は少なかったように思います。私は歯科技工士であったこともあり、

そのような歯科医師たちの多くと交流をもつことができ、それぞれの考え方や診療内容の違いを肌で感じることができました。咬合一つをとっても、Thomas 先生と C.H.Schuyler 先生とではまるで異なります。それを考えると、Pincus 先生と Goldstein 先生とが成し遂げられたことは偉業といっても差し支えないと思います。それと、このようなことをなし得ることができたのは、Goldstein 先生が、それぞれの先生たちの考え方や臨床をきちんと理解されていたからにほかならないでしょう。付け焼き刃な勉強の仕方ではこのようなことはできなかったと思います。

## “AAED”の誕生

### —“Total Integrated Therapy としての審美歯科”が誕生した

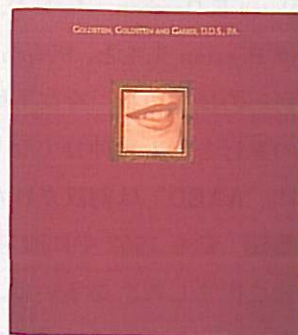
#### ■“AAED” 設立時の審美歯科のフィロソフィーが今にきている

**中原** 私は今から 10 年前に審美歯科臨床の実状を知りたくてアメリカに渡り多くの歯科医師、歯科技工士と話をする機会を得ましたが、そこで私が受けた審美歯科についての説明は、誰にうかがっても同じで、しかも、当時私が日本において認識していたものとは異なるものでした。

**桑田** 中原先生が渡米された当時の 1980 年代中頃の日本の審美歯科の臨床については、先生はどのように認識されていたのでしょうか。

**中原** 当時、日本においては、まだ「日本歯科審美学会」も設立されていませんし、個々人がアメリカやヨーロッパに出向いて知り得た知識で、個々に審美を語っているという状況だったと思います。しかも、残念なことに歯周疾患についての治療も普及していない状態でしたので、必然的に、「審美歯科＝歯科技工士の好み・手技」といってもよかったですのではないのでしょうか。つまり簡単にいえば、歯科技工士の好みや手技の範囲内で、いかにも天然歯に似た補綴物の色調と形態を作り上げるというレベルだったといえるのではないのでしょうか。しかもそこには、機能という要素が含まれることは少なかったと……。

**桑田** 日本の場合、残念なことに、まだその傾向から脱却していないと思うのですが、すでに 1976 年の Goldstein 先生の大著“Esthetic in Dentistry”（羽賀通夫訳「エステティックデンティストリー—審美歯科の臨床」1985 年、医歯薬出版）におい





て、「……歯科美学は患者に自己満足をもたらす助けとなりうるが、それはつねに健全な歯科医療に基づくべきものであり、全体的な歯の健康に沿ったものでなければならぬ……」と述べられています。

中原 まさしく、それが、今も変わらない審美歯科の目的だと思います。10年くらい前のアメリカで、当たり前のように聞かされた審美歯科のフィロソフィーです。日本の場合は、あまりにも技術、つまり手段にウェイトが置かれすぎているように思います。ラミネートベニアを応用すれば、それがイコール審美であるとか……。

Goldstein 患者の主訴に限りなくおもねることが審美歯科の臨床だと勘違いされている方もいらっしゃるようですが、そうではありません。しかし、だからといって患者の主訴をないがしろにして術者のやりたい放題をするわけではありません。歯科医学的に必要なことと、患者の主訴をはじめとする心理的な要素とのバランスのなかで、はじめて成立をします。ですから私は、“AAED”を設立する前後では、黄色い“FUNCTION（機能）”という文字の背景から“BEAUTY（美）”という文字が飛び出して融合しているスライドをよく使いました。つまり会を設立した当初は、「機能」を説かれる方と「審美」を説かれる方との融合が大切だったからにほかなりません。

このフィロソフィーをもっとわかりやすく表現した言葉が“Total Integrated Therapy”です。桑田先生が今紹介された“Esthetic in Dentistry”は、このTotal Integrated Therapyについて書かれた最初の書ではないかと思っているのですが……。術式が多様化しようとフィロソフィーは変わるものではありません。



▲私のオフィスでは、診療システムやフィロソフィーを患者が理解する手助けのためのパンフレットを作成している。表紙を開いた扉のすぐ後の2～3頁見開きで、まず診療に関するフィロソフィーを紹介している<Goldstein>

## ■アメリカでも審美歯科はなかなか認められなかった

**中原** 今から10年前にすでにアメリカでは、少なくとも歯科関係者の間では審美歯科のフィロソフィーが定着していました。確かに“AAED”が実力者の集合体だとしても、日本の現状と比較すると驚きを禁じえません。

**Goldstein** 学会ができたといっても、やはり、審美歯科が一定の評価を得ることは簡単なことではありませんでした。歯科医師を教育し考え方を変えるには時間がかかります。実際、“AAED”を設立した当初は、審美歯科の臨床を行っている歯科医師は少なく、評判もよくありませんでした。あのPincus先生にしても、歯科医師の仲間内ではよい歯科医師とは評価されませんでした。二十数年前は、ナソロジーの理論に基づき全調節性咬合器を使いこなすことや、セラミックスではなく金合金を使用することがよいことだと思われていましたから。

**桑田** 特に咬合論が華やかかりしころでしたから、複雑な機構の咬合器を使いナソロジーやPMSテクニックなどに基づく咬合治療を行わないと軽蔑されるような傾向がありましたね。それにセラミックスは認知されていませんでしたから、患者の口の中は金合金だらけでした。

**Goldstein** 本質的には、咬合の重要性を主張する歯科医師も審美の重要性を主張する歯科医師も、患者のことを考えていることは間違いないのです。それは、個々の人たちと交流を深めるなかで非常によくわかりました。つまりその表現方法に違いが出ているのだと。しかし、いずれも術者主体にほかならず、本当は、もっと患者の意志を尊重することが必要だったのです。そのうえで、必要であれば全調節性咬合器を使用すればよいし、セラミックスを使用すればよいと。個々の術式よりも患者自身のセルフイメージを理解することが大切だと。

**桑田** Goldstein先生は学会を通じて教育により歯科界を変えていこうとしましたが、セラミックスのリーダーであったStein先生は、常に戦いを強いられていましたね。

**Goldstein** Stein先生はリングに上がって戦った方でした。しかし私は戦うことではなく、桑田先生がおっしゃるように教育を通して変化をさせていきかけた。そのために、ある程度の時間がかかるのもやむをえないと考えたのです。ただし、学会のメンバーにはそれにふさわしい方々になっていただきました。

“AAED”の学会員は、基本的には教育に携わった経験のある、あるいは現役の教育者に限ったのです。なかには歯学部長やその経験者もいたわけですが、こういう会員構成であれば、各会員の発表に客観的に、冷静に対応することができますし、理解にばらつきが生じませんので、ディスカッションを通じて内容を深めることができやすいですね。しかも学会で得た結論の普及活動もスムーズにゆきます。



# ESTHETICS

## OFFICIAL NEWSLETTER

ROBERT P. BERGER, EDITOR

ISSUE: FEBRUARY, 1987

ERIC LABEYE-FUGIER DDS

*Beauty, Smile, Natural Building  
2001 Sunset Boulevard, Suite 301  
Los Angeles, California 90028  
(213) 458-1272*

September 16, 1986

To my friends and colleagues:

Dr. Charles Pincus was the founding president of the American Academy of Esthetic Dentistry, whom I had the privilege to work with in his, later part of life.

He was a father, a friend and partner in practice.

I wish to share this beautiful... "EULOGY FOR DR. CHARLES PINCUS", composed and given by Mr. Bob Hope.

Sincerely,

ERIC LABEYE-FUGIER, DDS

ELF/li



DR. CHARLES PINCUS  
1904 - 1986

### IN THIS ISSUE

- DR. PINCUS EULOGY
- PRESIDENT'S MESSAGE
- 1987 OFFICERS AND BOARD OF DIRECTORS
- GUEST EDITORIAL
- NEW MEMBERS
- SYMPOSIUM ON TEACHING AIDS
- ANNUAL MEETINGS
- BITES AND PIECES
- 6th CERAMIC SYMPOSIUM

## EULOGY FOR DR. CHARLES PINCUS

BY BOB HOPE, SEPTEMBER 7, 1986

Dr. Charles Leland Pincus was my dentist and my good friend Charlie, when I got the news on Friday that you had gone, it was the first time in 50 years that you hurt me.

When I first met Charlie, I liked him because he had every kind of degree a dentist could have, and I had a mouth that might need them all.

Not many people have the same dentist for 49 years. He'd have to be a special guy. You were, Charlie, it's something special to have a good dentist for a good friend.

Dr. Charles Leland Pincus... born in New Rochelle, New York in 1904, a caring, charming and uniquely talented man who became as integral a part of the Hollywood scene as Kleig or Limousines.

Charlie truly loved show business and everyone connected with it. He loved their warmth, their camaraderie, their sense of fun... and the fact that almost all of them needed their teeth capped didn't hurt, either...

Charlie had such a kind and gentle way with performers. The first time I ever went to him back in 1937 to have my front teeth capped, he sat me in the chair, clipped on my bib and, as he began adjusting the light, he said, "Which one's your good side?"

I knew then I'd found my dentist for life and that's the way it turned out.

Charlie was the dentist to the stars. Walking through his waiting room was like a trip through central casting. In a town built of legends, Charlie Pincus was definitely one in his own time! His patient list would be the envy of CAA, ICM, and William Morris. He knew them all, the greats and near greats. He was a gifted and skilled dentist, and the finest friend a man could have.

Behind that professional competence was a man with a huge heart and a great sense of humor. Charlie loved a good joke. I guess that's one of the reasons we were good friends for almost 50 years.

Charlie and Frances, Dolores and I shared many great moments. There were fishing trips... the golf games... and the wonderful times we enjoyed together. We're going to miss those times, miss his laughter... his humor.

Down deep, Charlie was a born performer. He was no less a giant in his chosen profession. Hall-of-Famer at U.S.C. and numerous awards... often invited by his colleagues to lecture all over the world on the latest trends and breakthroughs in dentistry.

No professional challenge was to great. When the best wanted the best, they went to Charlie. He flew all over the world to consult on difficult and extraordinary cases... And people used to come to him from the ends of the earth.

I was in the Ziegfeld Follies in Philadelphia in 1936 and we had to close the show for two days because the star of the show, Fannie Brice, had to fly to Hollywood to see her dentist, Charles Pincus.

A few years ago Monty Clift was in an auto crash and needed serious surgery on his mouth and the man they sent him to was Charlie Pincus... lucky Monty. He told me later that Charles' genius saved his career.

And he treated all his patients with tenderness... like they were family. Charlie revelled in the laughter, the applause, and the refreshing opportunity lecturing gave him to finish a performance without saying, "Don't bite down too hard."

Charlie was a man of wit, charm and a gentle kindness that endeared him forever to everyone lucky enough to know him. I was one of the lucky ones, as were most of you. Charlie touched our lives in a way that will keep his memory vivid in our minds always.

We all pass this way but once... But oh, how fortunate we are that Charlie's path crossed ours... 82 years is a long time... especially when it's a productive life like Charlie's: When you have the love of family that Charlie enjoyed: When you have the riches of friends that he seemed to attract, 82 years is a long time. But for those of us who

continued on next page

▲ "AAED" 初代会長の Dr. Charles Pincus の逝去を悼む機関誌においては、アメリカの著名な俳優の Bob Hope も巻頭に寄稿していた < 桑田 >

中原 学問的、臨床的、教育的にも優れた方たちが集まった組織であるがこそ、今の“AAED”の歯科界における認知を獲得した要因だったのですね。それでも時間はかかったのですか。

Goldstein 10年くらいはかかりました、中原先生がアメリカに情報収集にいらしたころまでかかったということです。しかし、“AAED”設立後には審美歯科に関するいくつかのグループも設立されるなどして、確実に根を下ろしていったのです。

中原 “AAED”には、もちろん情熱を注がれたのですが、それ以後に設立された組織とは、Goldstein先生はどのような関係をとられたのでしょうか。

Goldstein 学会の設立にあたっての相談もありましたし、設立後にも講演を行うなどしてお互いに協力関係を保ち、アメリカや世界規模で審美歯科のフィロソフィーが伝わることを第一に考えました。“AAED”が存在することが目的ではないわけですから、狭い視野に立ってはいけません。もし私たちが、他をけ落とすようなことをしていたとしたら、アメリカでもこんなに審美歯科が定着することはなかったはずですよ。

## そして、審美歯科はアメリカ国民にも定着した ——一般に対する情報の提供も学会の重要な仕事だった

### ■補綴・修復・矯正から予防歯科まで——審美歯科の将来性は明るい

中原 一時、80年代の前半くらい、アメリカの歯科医療経済が著しく停滞したことがありましたが、審美歯科は、一方で、デンタルマーケットという側面からも貢献をしたのではないのでしょうか。少なくとも10年くらい前においては、歯科医療経済も活性化をしていたように思いますが……。

Goldstein そのとおりですね。行き詰まって冷え込んでいた80年代前半の歯科医療経済を救ったのが審美歯科というフィロソフィーだったのです。非常にタイムリーに新たな歯科市場を拓いてくれました。

中原 機能と審美との融合ということが、術者サイドから見た場合の審美歯科の新機軸であることはGoldstein先生もおっしゃっていましたが、現実的にはアメリカにおいてはもう実現していますが、予防という側面も見逃すことができません。特にこれからは、そして、こういう意識をもつことによって、単に補綴や修復あるいは矯正といった治療行為と関連づけてしか語ることができなかった審美歯科が、健康な歯や歯周組織との関連で語るができるようになるのです。これは歯科市場としても、すばらしく広がることを意味していないでしょうか。

**Goldstein** やはり時代の流れがありますね。20年前や10年前と今とでは、歯科医学の状況が違います。かつては、補綴や修復の方法などを各論として論じていけばよかったものが、今では健康な天然歯をきちんとコントロールすることまでが要求されるようになってきていますし、それが可能です。それは、中原先生がいわゆるようにマーケットの拡大ということも意味をしています。こう考えると、歯科医療も非常に将来性があるということがわかるのではないですか。

**桑田** ところが日本の場合は、歯科技工士もそうですし歯科医師の場合も局所局所の疾患の対応に追われているというのが現実と聞いていますが……。

**中原** そうだと思います。アメリカと保険制度が異なるということもありますが、歯科医療の中心に患者がいると言うことは難しすぎます。その理由としては、アメリカでは“AAED”をはじめとして学会が一般の方々に対する情報の提供を行い、患者の教育にも力を入れましたね。それが、フィロソフィーや技術の獲得などの術者教育と相俟って効果を上げたのだと思います。術者サイドの受け入れ態勢と患者サイドの関心・安心感の育成の歩調をうまく揃えましたから。

#### ■マスコミを通じて一般のための情報を伝達する

**Goldstein** 一般に対する情報の提供も審美歯科を標榜する学会にとっては重要な仕事です。つまり、人々に対して歯科が何をできるかを知ってもらうことは、歯科医療における患者の主体性を促すことに通じますし、そうであるがこそ、審美歯科が社会性をもつわけです。審美歯科の学会が補綴学会や歯周病学会といった専門学会とは異なるところです。

**桑田** その点、アメリカの審美歯科の関係学会は一般のマスコミも巻き込んでよくやっていますね。歯科関係者の教育をアップグレードした後で一般マスコミも巻き込んで患者をモチベートし、そして促進をする。その結果、一般の人々も歯科関係者も利益を受けることができる。非常に望ましい姿だと思います。私がニューヨークのホテルにチェックインしテレビをつけると、突然、Goldstein先生の笑顔が目飛び込んできた。私は思わず先生に呼びかけてしまいました。

**Goldstein** 桑田先生の声は私には聞こえませんでした……（笑）。立場上、私は一般マスコミに登場することは厭いませんし、テレビやラジオのほかにも一般向けの本を出版したり雑誌にも登場します。つまり、そうすることが一般の人たちの歯科に関する情報を増やし、その結果、主体性をもって歯科医院に来院することを促すからです。

ある警官の患者が忘れられません。その患者は私の叔父の診療所に私の著書“Change Your Smile”を抱えて訪れ、自分と似たような症例が載っているから、

そこに出ている写真のような治療ができるかと聞きました。彼は、その本の著者が私であることも知らずに、適当に診療所を決めて来院したのですよ。

中原 患者はその本を見て、自分の目で確かめて関心をもち、そして自分から歯科診療所を訪れたわけですね。適切な情報を一般に提供することの効果の典型ですね。



▲一般への歯科に関する情報の提供は学会の仕事としても重要である。これは雑誌“The Season”に掲載された記事<Goldstein>

## 審美歯科のパイオニアが日本に求める歯科関係者間の交流、そしてこれからの自分の役割

■日本の審美歯科の関係者はあまりにも交流が少なすぎるのでは

中原 “AAED”をはじめとするアメリカの審美歯科に関する学会は、世界的なり

ーダーシップを担っており成果を上げています。その国と日本とを比較することが酷なのかもしれませんが、率直なご感想として Goldstein 先生は、日本がアメリカのレベルに近づくためには何が必要だと考えますか。

**Goldstein** 私が今まで日本の関係者とお会いした経験からいえば、まずユニシアチブをとるべき立場の歯科医師同士が話し合うことではないかと感じています。あまりにも多くのグループがあり、しかもグループ間や個々の間での対話が少ないのではないかと。このようなことから、なかなか専門家内でのコンセンサスを形成することは難しいでしょうし、国民に対する情報の提供や啓蒙はなおのことだと思います。一部の歯科関係者や一部の国民が理解を示したところで、審美歯科が社会性を帯びるわけではありません。

それと影響力をもつ学会のあり方ですが、確かにすばらしい症例を発表される方がいるかもしれませんが、それが、単なる自慢会になってはいけません。やはり、お互いに啓発し合わなければなりません。そうでないと学会の発展もないでしょう。

**桑田** 日本人の場合は、非常に勉強熱心なのはよいのですが、それが歯科界全体の総意として集約されないと、一般社会に向かっての大きな力にはならないですね。審美歯科の場合はこれが大切なことなのです。

**Goldstein** 一方で、本年4月4日から6日にわたって開催された“2nd Congress of the International Federation of Esthetic Dentistry”において平沼先生（平沼謙二・愛知学院大学教授）が述べられたように、日本ではアンダーグラジュエートの教授要綱のなかに審美歯科が採り入れられようとしています。こういう先進性についてはアメリカのほうが見習わなければならないことだと思います。アメリカでは審美歯科のコースを取り入れている大学は6、7校しかありません。

**中原** 小手先の技術の教育よりもフィロソフィーの教育のほうが優先されるべきでしょうね。

#### ■脇役として世界の学会の活動をサポートしてゆきたい

**中原** 21世紀最初の年の2001年に、アメリカにおいて“3rd Congress of the International Federation of Esthetic Dentistry”が、Goldstein先生の学会長の下開催されます。これはどのような学会になりそうなのでしょうか。

**Goldstein** 国際学会の発案自体は私のものですが、2001年の国際学会では、もう私は脇役を務めるつもりです。それにも増しての関心事は、2001年までに開催される各国、各地区の学会がスムーズに開催できるように、さらに内容を高めることができるようにサポートをしてゆくことです。

**桑田** でも、21世紀を占う学会になるはずだと思いますから、私も楽しみにして

いますし、お手伝いできることはさせてもらうつもりでいます。

**Goldstein** いろいろ言ってきましたが、アメリカも私もまだまだすべきことが多いですし、課題は山のようにあります。それを考えますともっと多くの関係者と知り合い、協力を求めていくことが必要だと思います。今回のこの座談会で、旧知の桑田先生とはもちろん中原先生とお会いして意見交換ができたことをありがたく思います。

**中原** 私は、あらためて審美歯科のバイオニアからフィロソフィーやその重要性をうかがうことができ、また自分の臨床を修正するいい機会になりました。

**桑田** そうですね。審美歯科というと、きれいなスライドを映して術式や材料の品評をする、というイメージから早く脱却できることを、これからの21世紀には期待したいですね。



▲ Dr.Goldstein が敬愛する父 Irving H.Goldstein と診療を行っていたビル。  
現在では David A.Garber, Maurice A.Salama, Henry Salama という歯周治療、  
インプラント治療、矯正治療、それぞれの分野で世界的な評価を得ている歯科医師とチームを組んでいる<中原>

▲ Dr.Goldstein オフィスの  
歯科技工を担当している  
Adar Pinhas とビル内の  
歯科技工室。ゆったりとし  
たスペースの大理石仕様の  
清潔な室内で、器材は戸棚  
に収納されている<中原>





## 日本の審美歯科の現代史

日本の歯科医師は、常に高度なテクニックと材料に強い関心を抱いてきたが、今世紀の大きな推進力は機能的な修復・補綴、特にナソロジーと顎口腔系の理解にあった。また、現代の審美歯科に対する主な関心は、総義歯と部分床義歯に置かれていた。しかし、修復および固定性補綴物における審美歯科への関心が、Ronald E. Goldsteinの古典的な書である“Esthetics in Dentistry”(J.B. Lippincott 出版)をきっかけに高まった。この日本語版は1985年に故・羽賀通夫教授(元東京歯科大学)によって翻訳・出版された(医歯薬出版)。これは、修復学とその他の分野(矯正歯科学、歯内療法学、歯科補綴学、歯周治療学、小児歯科学、心理学、形成外科学、美容学)を統合した、総合的な審美的アプローチを強調した最初の本であった。

“Esthetics in Dentistry”の翻訳によって、主に審美性を求める患者に対する治療計画が以前に比べはるかに総合的なものとなった。

Goldsteinは1982年に日本で最初の講演を行ったが、その際に彼は、侵襲性の高いフルクラウンの手技に代わる審美的形態修正法(cosmetic contouring)、生活歯の漂白法、コンポジットレジン接着法を中心とする保存修復的な審美歯科について多くの概念を説いた。この考え方は1979年本に発表された総山孝雄教授(元東京医科歯科大学)の教えに合致する。“Esthetics in Dentistry”以前は、審美歯科に関する文献はほとんど総義歯や部分床義歯の審美性が対象であった。Goldsteinは天然歯に総義歯の原則を適用し、修復物の審美性を高めるためのプロトコルを開発した。また、審美歯科を分野ごとに「解剖」し、一般の歯科医師と専門医が診断・治療計画の段階から協力すれば全体的な結果の向上につながることを示した。また、患者の審美歯科治療への動機を心理的に理解することの重要性がこの本を通して強調され、歯科医師に対し患者の欲求、要求・期待に関する認識を高めるよう促した。

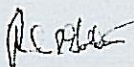
1989年に丸山剛郎教授(大阪大学)による「微笑みをあなたに」の翻訳により一般の関心が高まった。本書は歯科医師を対象に販売されたが、患者が読めば審美歯科のさまざまな治療形態と各治療の利点と限界について学ぶことのできる初めての本であった。

審美歯科のさまざまな側面に関する多くの歯科専門誌への登場や臨床論文の発表に加えて、審美歯科の発展を促した第三の要素はAmerican Academy of Esthetic Dentistryの設立であった。最大の成功を収めたGoldsteinの著書“Esthetics in Dentistry”に描かれたことを基にGoldsteinとDr. Charles Pincusにより設立されたこの学会は、各専門分野の観点から審美歯科について論議するために、ほとんどすべての専門歯科分野の指導的立場にある臨床医を毎年1回一同に集めたのである。この審美歯科の最初の学会は大成功を収め、年次大会には世界中の歯科医師が参加するようになった。またその結果、日本歯科審美学会をはじめとする審美歯科の組織が各国に誕生し、文献も発表された。

“Esthetics in Dentistry”が1976年に出版されて以来、ポーセレンラミネートに関する本とDr. David Garberと共著で臼歯部の修復に関する本を2冊執筆した。また、彼が息子のDr. Cary GoldsteinとDr. David Garberと共に執筆した歯科における審美的画像法(esthetic imaging)に関する新しい本が1997年秋に出版される予定である。

このように、審美歯科における関心が日本において急激に高まったのは、GoldsteinとDr. Pincusだけでなく、桑田正博、保母須弥也両氏をはじめとする日本歯科審美学会会員やAmerican Academy of Esthetic Dentistry会員など多数の方々による二十数年間の努力の成果であった。

この極めて大きな関心の高まりにより世界中に何十もの学会が誕生し、1997年4月4～6日には京都において第2回国際会議を開催した丸山剛男教授を初代会長とするInternational Federation of Esthetic Dentistry(IFED)が設立された。



Ronald E. Goldstein

翻訳・桑田正博

本原稿は、Dr. Ronald E. Goldsteinのみたわが国の審美歯科の歴史的な経過を客観的に解説していただいたものである<編集部>

